

ほととぎす
鳴きつる方を
ながむれば

ただ有明の月ぞ残れる
「小倉百人一首 第八十一番 後徳大寺左大臣」

the pale moon
in the sky of dawn. ㊦



I look out to where
the little cuckoo called,
but all that is left to see
is the pale moon
in the sky of dawn.

㊦ Fujiwara no Sanesada

大意

(待ちに待った)ほととぎすが鳴いていたあたりを眺めると、ただ、有明の月だけが残っていた。

英単語

○the little cuckoo = ほととぎす ○pale = 青白い ○dawn = 夜明け

余韻から想起される情景

古典の世界では、ほととぎすは夏の一番の風物詩であり、夜中まで起きて待つでもその一声を聞きたいと思われる鳥でした。日本人でも外国人でも、現代人にとつて、必ずしもほととぎすは身近な鳥ではありませんし、特段思い入れもないでしょう。しかし、この和歌が詠まれ、また読まれた文化圏では、ほととぎすの声を夏の夜の、何より待ち遠しいものと捉えるのが当然の感覚でした。たとえば現代で「サンタクロース」といえば、「冬」「夜」「プレゼント」、そして「待ち遠しい気持ち」が、次々と想起されるように。

さて「百人一首」に戻ります。今回の歌は「一見すると特に何も起らないように見えるかもしれませんが、ここまで述べてきたような和歌の世界観の中で見ると見方が変わってくる歌です。

この歌のほととぎすとは有明の月の取り合わせは、この歌の主人公が、一晚中ほととぎすが鳴くのを待っていたのだからと、自然と想像させます。しかし、待望のほととぎすは、たった一声で飛び去ってゆきます。その声が見上げた方を見上げてみると、ほととぎすは影も形も



ピーター・マクミラン
翻訳家 詩人 アーティスト
アイルランド生まれ。アイルランド国立大学を卒業後、渡米し、博士号を取得。森林大学教授などを歴任。日本在住30年余り。2008年に英訳百人一首 One Hundred Poets, One Hundred Each を CUTLIP 出版。日本と翻訳家を交わり、1996年に英訳『和歌物語』The Tales of Ise, 1998年に新訳百人一首 One Hundred Poets, One Hundred Each Penguin Booksより出版。2017年に英訳『和歌百人一首』を文庫より出版し、1999年、英訳百人一首からなる W H A C K A W A K A を KAWADA より発売。

ありませんでした。ただ有明の月だけが変わらずに残っています。

夜空を舞台に、聴覚と視覚が一体となって醸し出す余韻が、この歌の大切なポイントです。その余韻が見事に響いているからこそ、「瞬だけ存在していた主役のほととぎすが、鮮烈に印象付けられるのです。しかし、これほど余韻の強い歌でありながら、「行方」「名残」「形見」といった表現は一切ありません。説明的な表現を避けて、モチーフの積み重ねにより余韻を持たせています。

英訳を通して日本文化に出会う

『小倉百人一首』翻訳の挑戦

和歌の修辞などを踏まえ、読み札と取り札のイラストに「絵合わせ」の要素を取り入れた英語の五行詩、百人一首からた「WHACKAWAKA (ワカワカ)百人イングリッシュ」を作成されたピーター・マクミラン氏。今回は、その翻訳を通して、苦心された点や日本人の価値観・文化等について、感じられたことを語っていただきました。

文化の背景から知り得る感性

まず上の句を見てみましょう。「宵ながら」とは、直訳すると「宵の状態で、宵のままで」ということ。宵のまま夜が明けるといのは、もちろん現実にはありえません。それほどまでに夏の夜は短く感じられると言いたいのです。

さてそれでは、その短夜に何があったのでしょうか。下の句を見てみると、月が登場しています。しかしその月は「雲のどこに宿っているのだろうか」と言われているのですから、雲の中に隠れてしまっています。和歌では、月は非常によく詠まれるモチーフです。その月が見えないというのはどこかあっけなく、拍子抜けするようでもあり、夏らしい清々しさが感じられるようでもあります。また「月やどるらむ」という言い方は、月を擬人化しており、月に対する親近感を感じさせます。この歌にユーモアを見る人もあれば、月を思う澄み切った心を見出す人もいます。ただ、どちらの解釈も、英語圏の読者にはピンと来ないかもしれません。元の歌が淡々としているだけに、そのまま訳すと盛り上がり欠けるように見えてしまいますし、それなりに和歌に慣れている

読者でないとい、この歌のユーモアや意外性を感じ取れないでしょう。

また、雲に隠れて見えない月を見ようとする姿勢も、とても日本的なものです。私は徒然草百三十七段の「雨に向かひて月を恋ひ」と通じるものがあるような気がしました。こうした発想は西洋の読者にとつてはとても新鮮に映りますが、同時に見慣れないものです。西洋の読者がこの歌に意外性を感じ取れたとしても、それが詩的なものだと感じにくいかもしれません。私の訳では原文同様「のこ」を擬人化して訳したので、若干の親しみと機知は入れましたが、翻訳の難しさを感じました。和歌の英訳では、文字通りの内容だけでなく文化の背景を踏まえて訳さないとけないところに、いつも苦労しています。

今回の八十一番三十六番は、今ここにいないものを心で見つめて歌うものでしたが、この発想には日本文化の独自性が見えるような気がします。そしてまた、離れた時代と場所にある歌と歌が結びつき重なる「百人一首」というアンソロジー(詞集)の楽しみも感じられたように思いました。



where is the moon at rest
among the clouds? ㊦

On this summer night,
when twilight has so quickly
become the dawn,
where is the moon at rest
among the clouds?

㊦ Kiyohara no Fukayabu

英訳百人一首からた「WHACKAWAKA 百人イングリッシュ」(株式会社カワダより)

大意

夏の夜はまだ宵の口と思っているうちにそのまま明けてしまったというのに、月は雲のどこに宿っているのだろうか。

英単語

○dawn = 夜明け ○rest = 休む

和歌の修辭などを踏まえ、読み札と取り札のイラストに「絵合わせ」の要素を取り入れた英語の五行詩、百人一首からた「WHACKAWAKA (ワカワカ)百人イングリッシュ」を作成されたピーター・マクミラン氏。今回は、その翻訳を通して、苦心された点や日本人の価値観・文化等について、感じられたことを語っていただきました。

夏の夜は
まだ宵ながら
明けぬるを
月やどるらむ

雲のいづこに
月やどるらむ

「小倉百人一首 第三十六番 清原深養父」

＜用語解説＞

※1 ●徒然草「つれづれごと」

鎌倉時代後期に美好法師が自身の経験から得た考えや逸話などを書き綴った、二百四十四段から成るとされる随筆集。